

京都教育大学 FD ニュース

No. 78

2016年2月16日

京都教育大学 FD 委員会

1. 平成27年度第2回FD研修会

(1)「京阪奈三教育大学双方向遠隔授業について」 報告者 谷口慶祐委員

はじめに

遠隔授業のシステムは、三教育大学の教室にそれぞれテレビ会議システムと電子黒板を設置し、いずれかの大学で行われている授業を、他の二大学から受講できるようにするシステムで、平成24年10月から運用開始されました。

授業の進め方

授業では、パワーポイントなどを用いた資料をスクリーンに表示する場合、それらの画像が、他大学にも同時に送られます。講演者の声はマイクによって、また講演者の姿や板書の様子、受講生の様子などは複数台のカメラを通して同じように送られますが、カメラの向きや倍率の変更などは適宜付き添っていただける事務の方をお願いすることになります。

配布資料は、自大学の受講生に対しては、通常と同様に用意しますが、他大学に関しては、pdfファイルを作成して京阪奈三教育大学LMS(Learning Management System)にアップロードし、事務の方にダウンロードと印刷をお願いすることになります。したがって配布資料は直前の完成では間に合わず、少なくとも1日以上前にアップロードしなければなりません。将来的にはpdfファイルをそのまま配布し、受講生がタブレット端末などで閲覧するといったことも考えられます。

実施段階とその特徴・課題

第1段階：運用開始

遠隔授業によって、三教育大学それぞれが専門分野をお互いに補完しあえるとともに、授業の重複を改善し、負担軽減ができるようになります。

第2段階：双方向を生かす(アクティブ・ラーニング)

次に遠隔授業・双方向の特徴を生かし、質的向上を図る段階になります。例えば相応しい授業形態とはどのようなものなのか、PCを積極的に活用するためにはどのような工夫を進める必要があるか、などです。

またいくつかの留意点も浮かび上がります。例えば、従来からの知識の伝達を主とする方式と比較して、どうしても進み方は遅くならざるを得ないことをどう解決するか。マイクを通して受講生同士が意思疎通や討論を積極的に行うには、設備を含めてどのようにすればよいのか、などです。なおこれらに対しては、あらかじめ課題を提供し、意見交換することを予告しておくなどの対策が考えられます。

第3段階：三大学のソフトな融合

カリキュラムを総合的に見直し、三大学のカリキュラムの体系を有機的に連携させることにより、相乗効果が期待できます。また三大学の学生の人的な交流が行われれば、さらにその効果は大きくなることが期待できるでしょう。

(2)「授業改善のための授業評価アンケートの活用について」 報告者 田爪宏二委員 はじめに

ここでは、授業改善という視点から、授業評価アンケートの解釈や活用のポイントについてお話ししたいと思います。

まずはじめに、学習に関する近年の考え方に少し触れながら考えてみたいと思います。従来、授業における学習は教員から与えられる情報に対する、個々の学生の知的活動やその結果という視点から捉える傾向にありました。他方、近年では、学習とは状況に埋め込まれたものであり、コミュニティや文化に実践的に参加、関与することによって学習が成立すると考える立場（状況学習理論）が注目されています。この立場に依拠すると、授業における学習とは授業に参加している教員と全ての学生が授業というコミュニティに主体的に参加し、ともに学び合い、知を共有するプロセスであると考えられます。学生が授業の内容、教師、他の受講者と主体的にかかわることによって学習を進めるという考え方は、近年のアクティブ・ラーニングの発想と共通するところがあると考えられます。

授業評価は、環境アセスメントのモデルであるPDCAサイクルのうち、C（Check）に位置づけられます。そこにおいて上で述べた学習の考え方を踏まえると、学生による授業評価は、授業の受け手である学生が与え手である教員や授業を評価する、というよりも、むしろ、同じ授業に参加する学生と教員とが一緒に良い授業を作り上げていくために行われるものであると考えられます。

授業評価アンケートの内容と解釈

授業評価アンケートでは、次の項目が設けられています。すなわち、まず、授業に関する評価として、授業の内容（授業は難しかったか、テキストのレベル）、授業の方法（授業は体系的であったか、説明はわかりやすかったか、授業の進む速度（進度）、理解や反応に合わせた進行）が設定されています。さらに、学生自身の学びに関する評価（授業時間外の学習（学習態度）、評価する資格があると思うか（学習態度）、テーマ・領域に興味を覚えたか（科目への興味）、意欲的に取り組んだか（学びへの意欲））や、総合的な授業の満足度（授業の満足度、教員になる意欲や動機）が設定されています。

これらの、授業の内容や方法、学生自身の学び、総合的な授業の満足度は独立したものではなく、相互に関係があると考えられます。一例として、私が担当した授業において、これらの関係を分析した結果を図1に示します。この図は学生による授業評価アンケート（但し、

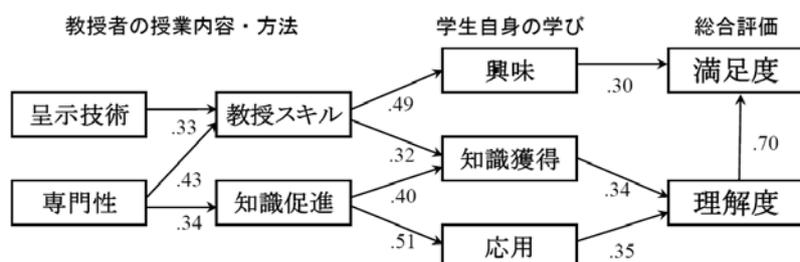


図1 授業の評価要因におけるパス・ダイアグラムの例
(田爪・高垣,2009)

本学で実施しているものとは別に行ったものです)を多変量解析により分析したのですが、次のようなことが読み取れます。すなわち、教師は専門性を持っているだけでなく、内容を学生にわかりやすく、かつ応用可能な形で話すことが、学生の学びにつながる。学生が科目に対して興味をもつことは科目の満足度に繋がる。その他の学びの要因は理解度を高め、そこから満足度に繋がる、ということです。但し、これはあくまでも1つの授業の例ですので、授業の内容、特性によって異なると考えられます。

解釈における留意点

各授業は目的、内容、方法とも全て違うものですので、アンケートの結果は異なる授業科目同士を比較するものではありません。また、評定得点の昇降を単純に授業の良し悪しと結びつけることはできず、得点の昇降の背景にある要因を慎重に考察することが重要になります。具体的には、授業の適切さとは別の原因で評価が低下する事があります。例えば、講義が進むにつれ内容が難しくなることや、新しい項目に移行した場合には評価が下がることもあります。また、複数時にわたる授業の1回目は基礎的な部分のみを講じることが多いため、全体における内容の位置づけが難しく評価が下がる場合があります。その他、学生自身の知識、技能が向上することで、より高い水準を求めたり、学問の奥深さに気付いたりすることによって学生自身の学びに関する評価が低下する場合があります。なお、得点の解釈が恣意的なものにならないためにも、得点とあわせて自由記述についても考察する必要があります。

また、授業評価は本来扱うべき内容に対してのものであることが必要です。例えば、分かりやすいと評価された授業であっても、必要な内容が扱われていなければ意味がありません。さらには、苦勞しても獲得しなくてはならない内容があったり、難しさを認識し克服することで学びが成立することもあります。このような内容を扱う際には、それらの内容を主体的な学習へ向けてどう意味づけるかという事が重要になります。

さらに、アンケートの精度を高めるためにも、回答者である学生にアンケートの目的の理解をはかることが重要になります。すなわち、アンケートは授業改善のための取り組みであるという共通認識を持ち、回答内容が成績に反映するなどの誤解、不安の解消する必要があります。

授業評価に対するコメントのシラバスへの記載について

次年度より、シラバスに授業評価のコメントが入力可能になります。これは、PDCAサイクルのうちA(action)、すなわち授業改善への視点を得ることに繋がります。また、学生に対しては授業評価のフィードバックという意味もありますので、是非活用していただければと思います。

さいごに

それぞれに独自の目標や特性をもつ授業を、共通の尺度による測定には限界がありますし、そもそも学生による授業評価はあくまでも授業評価の1つの側面でしかありません。とはいえ、授業評価アンケートは上述した点をはじめとして授業改善の試みのための1つの有効な資料と考えられますので、ぜひ有効に活用していただければと思います。

2. 平成 27 年度大学院授業アンケート調査結果

平成 27 年 11 月 18 日～平成 27 年 12 月 4 日の期間、授業の改善に役立てることを目的に大学院教育学研究科授業アンケートを実施しました。以下では、設問順に結果をお知らせします。

質問 1. 所属専修

提出者数（所属院生数）で表すと、学校教育専修：17(45)、障害児教育専修：2(12)、国語教育専修：8(12)、社会科教育専修：1(12)、数学教育専修：5(9)、理科教育専修：4(21)、音楽教育専修：2(5)、美術教育専修：5(9)、保健体育専修：1(7)、技術教育専修：3(7)、家政教育専修：2(6)、英語教育専修：6(8)となり、全体では 56(153)で 36.6%の回収率でした。なお、昨年度は 46.0%の回収率でした。

質問 2. 授業に関する全体的な評価

授業の全体的な評価に関する設問に対する回答は次の通りです。「その他」「無回答」を除外すると、「期待以上」「期待通り」の合計は a：98.0%，b：93.8%，c：95.7%，d：89.6%であり、概ね高い評価を得ていると言えます。

a. 教育学研究科の授業内容は、全体として、あなたの期待に応えるものでしたか

	期待以上	期待通り	期待はずれ	その他	無回答
N (%)	10 (17.9)	39 (69.6)	1 (1.8)	4 (7.1)	2 (3.6)

b. 「実践特別演習」は、あなたの期待に応えるものでしたか

	期待以上	期待通り	期待はずれ	その他	無回答
N (%)	15 (26.8)	30 (53.6)	3 (5.4)	7 (12.5)	1 (1.8)

c. 「教科内容論」は、あなたの期待に応えるものでしたか

	期待以上	期待通り	期待はずれ	その他	無回答
N (%)	12 (21.4)	33 (58.9)	2 (3.6)	5 (8.9)	4 (7.1)

d. 「学校教育実践総論」は、あなたの期待に応えるものでしたか

	期待以上	期待通り	期待はずれ	その他	無回答
N (%)	8 (14.3)	35 (62.5)	5 (8.9)	6 (10.7)	2 (3.6)

質問 3. 期待どおり・期待以上の科目の理由（どういう点がよかったのか）

36名(64.3%)が回答しており、主な意見としては、次のようなものがありました。専門的な内容や教育実践と関連付けた学び、少人数での参加型の授業、教育実践や自身の専門へ生かせる内容、教員の適切な指導に関する内容が挙げられていました。

授業の専門性に関する意見

- ・ 専門的知識を得ることができ、自分の世界観が変容する気がしました。
- ・ 単なる実践だけでは培うことができない、理論的背景をもった実践ができると思います。

- ・ 毎回教授を交替しながら、様々な分野の講義を受けることができた。
- ・ 学部の頃には学ぶことのなかった分野について学ぶ機会が増え、教育に生かせると感じました。
- ・ 学部の授業よりも深い内容であったことと、現場の実態が分ることもあったから。
- ・ 学びを端緒として、次の研究への足がかりとすることができると感じた。
- ・ 専門的内容に加えて、「教育に活かす」という視点で学ぶことができるから。ただ“how to”に終始するのではなく、理論に裏打ちされた内容なので、教員になった後にも、役に立つ、深い学びができています。
- ・ 今まで知らなかったことや、きちんと知っておくべき現状などふみ込んだところまで授業で扱っておられて、勉強になるし、色々と考えさせられる授業だから。
- ・ 大学の時に聞けなかったことが内容にあったから。教科一つに特化している為、専門性は高められると思う。
- ・ 教育のカリキュラムについても、知るだけでなく、具体的に自分たちで考えられる機会があり、理論の応用になっていた。

授業の形態に関する意見

- ・ 一斉授業のようなスタイルではない。人数が少ないので、討論を交えながらのスタイルになっている。
- ・ 研究、制作、学校の授業の題材の参考になるものが多い。
- ・ 各自が作ったレジュメをもとに、議論を交えることができたので、授業への参加に意味が感じられた。
- ・ 各自の専門的な内容をディベートする授業が多いため、見識が広がる。
- ・ 学生数が少ないため、先生方と交流したり、興味のある資料をいただくことができる。
- ・ 学部にいた時より、演習量が多く充実しているように感じるから。
- ・ 受講者同士で議論ができ、教授からの助言が得られる。
- ・ 少人数なのが良かった。

授業の有益性に関する意見

- ・ 学校に行かせて頂いたり、検査を実際にでき、実践につながるものがあったから。
- ・ 専門知識を学びながら、教育現場の実践的なもの（授業）に具体化することで理論と実践がつながり今後の指導に役立つ内容。
- ・ ディスカッションが多いので自分の意見をまとめたり周りから多様な意見を聞く中でも多くの学びがある。
- ・ 現行の教材を扱えたため。
- ・ 自分の研究手法の場を広げることができたから。
- ・ 期待以上に自分のためになったから。

教員の指導に関する意見

- ・ 先生が生徒各人に丁寧に指導をくださること。
- ・ 丁寧に参考文献の紹介などもあり勉強になった。
- ・ 学生の理解度を配慮して進む授業が多いから。

質問4. 授業内容が期待にそぐわない場合の理由（どういう点が期待通りではなかったのか）

11名(19.6%)が回答しており、主な意見としては、次のようなものがありました。授業の専門性の不一致や難易度に関する事、集中講義や課題の日程に関する事などが挙げられていました。

- ・ 自分の専門分野以外の内容が多く、少し残念であった。
- ・ 内容が今いち今後の自分に必要かどうか分からない。
- ・ 教員免許がなかったり、教員経験がないと全く分からない内容でした。
- ・ シラバスをみてイメージしていた内容とちがったため。
- ・ 学生が主体となる授業は正直つまらない。教授が講義を行うべき。
- ・ 教職大学院との合同授業は、講義内容が学部レベルの場合がありました。
- ・ 複数の先生が持ち回りにしている授業は、他の先生が何をされたか把握されていないので、体系的なまとまりはない。
- ・ 集中講義の日程が重なり、若干不都合を感じた。
- ・ レポートが集中して多くなったこと。

質問5. 授業の内容・運営に関する評価

授業の内容や運営の評価に関する設問に対する回答は次の通りです。「その他」「無回答」を除外すると、「ほとんどすべて」「約8割」の合計は a : 88.0%, b : 72.5%, c : 84.6%, d : 59.6%です。授業が体系的であること(a)や教員の対応(c)については概ね高い評価が得られていると言えますが、それらに比して授業の判り易さ(b)やシラバス(d)についてはやや肯定的な回答の割合が低くなっていました。

a. 何割くらいの授業が体系的で良くまとまっていたと思いますか

	ほとんどすべて	約8割	約半分	約2割	ほとんどなかった	その他	無回答
N (%)	19 (33.9)	25 (44.6)	5 (8.9)	1 (1.8)	0 (0)	3 (5.4)	3 (5.4)

b. 何割くらいの授業が分かりやすいと感じましたか

	ほとんどすべて	約8割	約半分	約2割	ほとんどなかった	その他	無回答
N (%)	16 (28.6)	21 (37.5)	13 (23.2)	1 (1.8)	0 (0)	3 (5.4)	2 (3.6)

c. 何割くらいの授業で、担当教員が受講生の理解や反応を受け止めながら授業を進めていたと思いますか

	ほとんどすべて	約8割	約半分	約2割	ほとんどなかった	その他	無回答
N (%)	22 (39.3)	22 (39.3)	7 (12.5)	1 (1.8)	0 (0)	2 (3.6)	2 (3.6)

d. 何割くらいの授業においてシラバスが参考になりましたか

	ほとんどすべて	約8割	約半分	約2割	ほとんどなかった	その他	無回答
N (%)	16 (28.6)	15 (26.8)	15 (26.8)	5 (8.9)	1 (1.8)	2 (3.6)	2 (3.6)

質問6. 現職教員とストレートマスターとの合同授業で感じたこと（配慮して欲しいこと）があれば、記入してください。

30名(53.6%)が回答しており、主な意見としては、次のようなものがありました。授業に対する肯定的な意見としては、現場からの意見に触れることができることや、理論と実践の融合などのメリットが挙げられていました。他方、要望や不満に関する意見としては、授業の質の担保や授業運営における配慮などについての意見が挙げられていました。

肯定的な意見

- ・ 現職経験をしているからこそその知見・見解に触れることができていると思う。
- ・ 現職の方がおられることによって、実際の現場のことを含めて学べるので良かったです。
- ・ 現場の視点が自分たちにはないので、そのような部分で新しい知見を得ることができるのでよい。
- ・ 現場視点を授業内で共有できるので、理論と実践をバランス良く考えることができる点が、非常にためになる。
- ・ 現場で経験したことを、実際に議論を通し聞くことができ、理論が、実践でどう活用できるかイメージがふくらんだ。
- ・ 現職教員の立場で言えば、若い学生と一緒に授業を受け、議論や演習をすることで、学ぶことや刺激を受けることがたくさんあり気分もリフレッシュして、仕事（授業）にも役立っていると思う。

要望や不満に関する意見

- ・ 現場の先生方の知識に合わせた授業になってしまう。
- ・ 専門外の方が授業に入っても理解が可能なレベルでの展開がもう少し欲しい。
- ・ 現職教員の方に遠慮している、気をつかいすぎていると感じる。
- ・ 現職の方だけでかたまってしまふことがあったので、もったいないと感じました。
- ・ ロールプレイ等は均等にわかれるようにグループを作してほしい。

質問7. 各自の「課題研究」（修士論文の執筆）に関して困っていることがあれば記入してください。

29名(51.8%)が回答していましたが、うち4名は「適切なアドバイスをもらっている」など特に問題を感じないというものでした。残り25名(44.6%)における困っていることや不満については、次のようなものがありました。設備面ではパソコンや図書の不足、大学の入構制限に関することなどが挙げられていました。研究に関することとしては、調査のむずかしさ、統計や論文執筆など研究方法、費用面などが挙げられていました。また、時間の無さや修論作成への不安など、自身の能力や都合による不安も挙げられていました。

設備面

- ・ PCの確保。
- ・ パソコンによって統計ソフトのバージョンが違う保存やその他互換性の問題が生じる。
- ・ 古い教科書を申請を出して館内で見ると10冊までしか見られない。借りられない。
- ・ 先行研究を探すのが難しい。図書の本も少なく思う。
- ・ 年始に大学に入れない。IPCが使えなくなる。

研究に関すること

- ・ 附属学校へのアンケートの取り辛さ。
- ・ 統計の授業を増やしてほしい。
- ・ 修論の書き方を相談できたらよかった。
- ・ APA, MLA など様々な様式がありますが、大学規定のものと異なっており、何の様式に合わせればよいのかわかりません。
- ・ 学会費や、視察や発表のための交通費、実践のための材料費が全て自己負担だったのが金銭的に辛かった。先生と研究テーマが異なる学生にも e プロのように少しでも金銭的援助がしてもらえる制度がほしい。
- ・ 他領域の専門性を活かしたい時があるが、大学内の教授が授業等で忙しく連携が取りづらい。

自身の能力や都合による不安

- ・ 終わるイメージが持てないことが最大の悩みです。
- ・ 時間が思うようにとれないこと。
- ・ 調査の始動が遅く、時間が足りなさそうなこと。

質問 8. 「その他」の自由記述

9 名 (16.1%) が回答しており、記述された主な内容は、次のとおりです。その中には大学院教育に関する前向きな考えを述べたものもありました。他方、少数ではありますがこのアンケートに対する要望や教員に対する指摘もありました。

大学院教育に対する考え、意見

- ・ 実践だけでなく理論を学ぶ事で、指導の裏付けが出来指導の流れやポイントがより見えてくると思う。
- ・ 専門性の高い教員を現場に送り込む事が、より良い教育を生徒に与える事になり日本の社会を支える人材を育てる事になる。
- ・ 予算を増やして、他大学との交流も必要に思う。

アンケートに対する要望

- ・ 授業によって違うので、ざっくりした質問をされても答えに困る。
- ・ 各授業ごとにアンケートをとった方がいいと思います。
- ・ このアンケートが活かされている実感が無いので、どう対応しているか、わかる文章などなんらかの反応が欲しい。

教員に対する指摘

- ・ 大学の教授が授業の時間どおりに教室にこない。

以上の調査結果を、今後の授業改善に役立てていただけたら幸いです。

問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD 委員会委員：安東（委員長）、大竹（副委員長）、古賀、谷口（慶）、田爪
（事務担当：富家、山本、相原）